



〈歌・小説・日本語〉65

## 短歌ブーム、その背景

勝又浩

いま短歌がブームなのだと聞いたり読んだりする。なるほど、本誌六月号で紹介した「文學界」(五月号)の短歌特集などもそうした背景を反映していたわけだ。それはまことに喜ばしいこと、また羨ましいこと、そして不思議なことでもある。

楽屋話めくが、私はこのあと、「批評はどうなってるのか」という趣意の原稿を書かねばならないが、そんなテーマがぐる裏には今、批評、とくに文芸評論が全く衰退しているという現実があるのだ。現にいまあげた「文學界」にも正統な文芸評論は一編も載っていない。かろうじて、安藤礼二の連載評論があるが、それは「燃え上がる図書館―アーカイブ論」というものである。興味がないとは言わないが、つまりは

文芸評論ではないのだ。私の学生の頃には、文芸誌の後半は批評家の名で埋まっていたものだ。

昔話をしても始まらないが、日々こんな問題意識のなかにいる私としては、一方の、短歌の繁栄という事実はいろいろな意味で気にかかることの一つだ。第一に、文学全体の凋落が言われて久しいなかで、日本文学のなかでも一番歴史の古い短歌が反って隆盛であるとは、それは何よりも喜ばしいことではないか。そして次に、文学のなかでも特に凋落の激しい文芸評論から見れば、それは何とも羨ましいことであるし、そしてその秘密はどこにあるのか、という不思議もある。思うに、短歌の隆盛と批評の凋落とは一体、コインの表と裏の関係、もつと言えば、短歌隆盛

入選歌の短「評」、およびコラム形式の「ページエッセイ」である。いかにも「短歌の時間」、つまり短歌実作教室なのだ。ちなみに、投稿歌は毎月千首ほどで、そのなかから特選一首、秀逸二首、佳作六首が選ばれて、そのすべてに短評が付されている。

およそこんな一冊であるが、その母体が「公募ガイド」であるという事実には、私はまず唖ってしまふ。日本では新聞はもとより、企業や商店街のPR誌、労働組合の会報にも、投稿を主にした短歌俳句欄があるが、そういう文化の一つとして「公募ガイド」もあるという事実が面白い。昔、大学生に尋ねて一度だけ実物を見たが、私にはこういう雑誌があること自体が驚きだった。そのころ私はある文芸誌の小説新人賞の下読みをしていたが、応募者には小学生がいたり、レベル以前、作品としては全くお門違いなものがたくさん混ざっていた。編集者によれば、それらはみな「公募ガイド」によって、つまり当の雑誌自体を見ることも知る

こともなく送ってくるのだということだった。

この歌集の特徴の一つが、収録されている短歌のすべてが「題詠」または「テーマ詠」であることだ。「題詠」は短歌の伝統だが、「テーマ詠」というのは、私は初めて聴くことばだった。見て行くと、課題の語を直接歌に折り込むか、語は使わないが内容がそれを表わしているか、というような違いがあるようだ。しかし「テーマ詠」等と

耳慣れないことばのあったせいで気づいたのだが、与えられた課題やテーマによって作品を成すとは、小説には原則的には無いことだ。あるとすれば、それらは概してシヨートシヨートの類、つまりエンターテイメント系でのことであって、いわゆる純文学ではやらない。作品の生まれてくる必然、つまり作家の抱くモチーフにウソの無いことを重要視するからだ。

しかし、短歌の世界ではそれを日常として、しかもウソとはならないわけだ。それで、いま文学というものを、

のもろもろの条件は、そのまま批評衰退の条件でもあるだろう、というのが目下の私の見当なのだ。

私の現代短歌観きにはそんな興味関心も含まれているのだが、そういう観点から見ると、最近たまたま手に取った、東直子「短歌の時間」(春陽堂書店)はまさに現代短歌事情を集約象徴したような一冊だった。東直子は多才な人だが、東京新聞歌壇の選者の一人でもあって、彼女の選とその評には、私のような老人の目を開かせる新鮮さがある。記憶に留めていた。そんなこともあってこの「短歌の時間」を覗いて見る気になったのだが、以下、私、無知門外漢の驚きや発見、感想を述べてみたい。

まず驚くのは、この本のもとが雑誌「公募ガイド」の連載だったという事実だ。雑誌の投稿短歌欄「東直子の短歌の時間」の、平成二七年から令和三年までの六年間の掲載分を集めたものだと知っている。従って、ここでの著者の仕事は一五〇字程の「全体評」とあり、伝統なのだ。

実作をお見せする余地がなくて残念だが、こんなふうに一冊を眺めていると、ここにはお題やテーマにそって三十一文字にトリミングされた、まさにインスタ映えする光景情景が圧倒的な勢いで並んでいる。あるいは、生活日常だけではない、さまざまなストーリーやキャラクター、それらの立つ場面に状況に密着した吹き囃き囀りが、つまりさまざまなツイートが溢れていた。こういう現代の文学的一情景をみながら、私はつくづく、これはやはり小説や、まして評論には全くもって真似できないことだな、と思わざるを得なかった。





〔歌・小説・日本語〕66

## 露伴の日本語論

勝又浩

名にし負はばいざ事とはむ宮こ鳥  
わが思ふ人はありやなしやと

〔伊勢物語〕九

この「宮こ鳥」は、ゆりかもめのことだとは誰も知るとおりだが、それに「都鳥」などという字を当てたのは「歌の上の策略」だと幸田露伴は言う。「万葉集」に大伴家持の「船競ふ堀江の河の水際に来居つ、鳴くは都鳥かも」があつて、このあたりが「都鳥」と書いた始まりだろう、と。歌に詠まれる以前は、全国各地でネコドリ、ネコサギ、ウミネコ、ハマネコ等々と呼ばれていることが「本草綱目」に記されている。つまり鳴き声が猫に似ているところからそう呼ばれたのであるが、猫は日本でも昔はニャーではなく、世界共通のミャーと鳴いていた。ミャー鳥

だが、それらは必ずしも正確な声・音を伝えているとは限らないのだ。

なるほど、たとえば、牧野富太郎博士も間違つたように、東北地方へ行けばハマナスなのかハマナシなのか分からない等々、そんな例は限りなくある。字は必ずしも正確な声・音を表わすわけではないのだ。声・音は場所により、時代により、またその内部でも、前後の組み合わせによつて変化する。それは本質的に「幻」存在なのだ、というのが「音幻」の語のゆえんである。「音は幻生し、幻化する」のだ、と。

そこで露伴は日本語の全ての声・音、つまり五十音図のアからンまでの音一つ一つについて、古今の文献を検討してゆく。たとえば、ある書物にアと表記されている語が、別の書ではワと書かれていた事実、そんな例を数え上げて、結局のところアイウエオはヤイユエヨやワイウエオと交換されやすい事実を突き止めてみせる。一例だが、確かに我々はワタシとアタシの両方を耳にするが、それについて特に疑問も持たず

だから都鳥になった、というのである。

そう言われてみれば確かに、都の人・業平が「京には見えぬ」珍しい鳥だと言っているのに、武蔵の人・渡守が「宮こ鳥」だと言うのはちよつとズレがある。都にはいない都鳥？ どのだろうか。渡守は本当はミャー鳥だと言つたのに、都恋しい業平が都鳥と聞き間違つたのかもしれない。

幸田露伴晩年の仕事に『音幻論』（昭和二年）がある。日本語論の関連書を見ていると時々その名が出てくるのだから、かたがた気になつていたので、さいわいこの夏、読むことができた。その結果は――まず、いかにも露伴らしい博引傍証、膨大な用例の列挙に圧倒されて唖るばかりだった。余計なことだが、若いころ読んだ南方熊楠の、あの

に過ごしている。「私」の字は必ずしも一つの声・音を表わしてはいないわけだ。そこで露伴の仕事は五十音すべてのこうした変容を追求する作業になつてゆく。全く魂消るばかりの仕事だが、露伴という人はそういうことのできてしまう人なのだ。

この欄でも何度か触れたが、私は日本語の根本的な性格は母音主体言語であることだと考えている。露伴も使っている五十音図、こういう表が作れるのは世界の言語のなかでも日本語だけなのだが、そうした日本語のことは以前、音としての性格、それが言語はもとより、日本文化全体の性格、特徴をつくりあげている。早い話が、母音主体言語であるがゆえに短歌俳句も生まれたのである。

最近、そんなことを考え続けている私には、それゆえ露伴の「音幻論」という仕事、その発想のいわれがよく分かる。露伴は、「文法・語法の研究」はされているが、世界の言語を知るためには「声法」というものが研究されねば

止めどもないような列挙羅列文章のことを思い出した。これは、言うならば明治までの一つの知のあり方なのだ。露伴の場合も、もともと活きた百科辞典みたいな人ではあるが、コトバというものを、こういう方向で考えて行つて、この密度を越えられる人は、先ず他にはいないのではないかと思つた。

話が前後したが、露伴がここでやっていることは人間のことは以前の声、あるいはことばになつてゆく声としての音、その民俗学的な探求である。と言つてもむろん、柳田国男のように全国を歩いて収集したというわけではない。どちらかと言えば折口信夫のような、古今の文献を博搜して、そこから文献以前の姿を探り、浮かび上がらせようとするのだ。露伴によれば、人間のことを考えるには文法などよりも先に、その声・音から追究しなければならぬが、その声・音は言うまでもなく発すると同時に消えてしまふ、いわば現象である。痕跡、記録が残らない。いや、文字になつた記録はあるの

ならぬ」と言っている。これは私が、国語学、言語学が何故母音言語と子音系言語の違いについて問題としないのかと問うてきたことと重なるだろう。言い換えれば、露伴の提起した「声法」研究、「音幻論」は今なお学界では黙殺されたままなのだ。

初めに、都鳥が実はその鳴き声からきたネコ鳥なのだという露伴の説を紹介したが、ではそのネコはどこから来たのかと言え、当然その鳴き声ネーやニャーやミャーから来たとするのが露伴の説である。鳥や虫の名の大方はその鳴き声からきているのだ。そして、日本語ではm音とn音はしばしば音通するので都鳥ともなつたのだ。であるのに、たとえば「順和名鈔」ではネは鼠、コは好む、それゆえネコだとしている、とは露伴の指摘である。付け加えれば、知る人も多いであろう、よく寝るから寝子・ネコ説は、こういう語源論の好きな「大言海」の説である。「声法」を知らないとな、こじつけた意味に行ってしまうのだ。





〈歌・小説・日本語〉67

## 問われ続ける短歌俳句

勝又浩

「四拍子でない」と云ふのは日本に殆んどないだらう。無妙法蓮華経が例外だが、我邦は四拍子でおしなべてあるやうです」

と言っているのは幸田露伴、昭和一〇年のことだ。日本語の音律や拍のことを論ずる人は他にもいるが、この時代に日本語のリズム、日本語が基本的に四拍子言語だという事実を指摘した人は、私の知る限りでは露伴だけである。おそらく、前回紹介した『音幻論』を考えるなかでこの事実も発見していたのであつたらう。露伴の徹底ぶりが改めて思われる。

露伴にこんな発言をさせるきっかけは寺田寅彦の次のことばであつた。「僕は七五調と云ふものは、あれは本来四

尾實の、大学での最後の受講生の一人であつた。それは、もう昔話なのか、それとも、ついこの間のことなのか、実はよく分からない。

座談会では冒頭、司会西尾實が当日のテーマ「和歌俳句の不滅性」という問題を提起すると、和辻哲郎が即座に、「不滅と云つても、俳句なんぞはもう若い人には通用しませんよ」とまぜつ返している。他ならぬ和辻哲郎による俳句否定には、今読む私もちよつと驚いた。戦後の俳句否定時代はよく知られた歴史だが、戦前にもこんな意見があつたとは初めて知つた。しかし、露伴も直ぐ聞き返しているように、この「通用しません」の意味が曖昧だ。「若い人」たちが俳句を知らないのか（和歌なら知っている？）、それとも知ってはいるが時代遅れだ、あるいは意味や価値を認めないというのか、そのあたりがはつきりしない。しかし和辻哲郎はそれに答えることもなく、続けて彼がドイツで日本人仲間と歌仙を巻いた経験を語っている。折角ドイ

拍子の節奏から発達した形式ではないかと思ひます。日本人のムードと云ふものかね。また続けて、日本では糸車の音も四拍子であるが、西洋では、シューベルトの「糸紡歌」は三拍子だ、と指摘している。自分でもヴァイオリンを弾いた寺田寅彦は、音楽において、日本が伝統的に三拍子を持たない、四拍子の国だという事実が付いていたのである。ただ、それを「日本人のムード」だとして、氣質のようなものに帰しているのが残念である。私に言わせれば、それは音楽以前、母音系言語と子音系言語との違いから来たものだからだ。その点、露伴は、そういうことばは使っていないが、日本語自体の性格に気が付いていたわけだ。

ところで、この二人の発言は、今度ツにいるのだから「独逸の風物で一巻いてみようじゃないか」と試みるが、あくゆかなかつたというのである。努力して二、三句はドイツで持ちこたえるが、油断すれば直ぐ「日本に帰つてしまふ」。そして、「つくづく感じたのです。俳句は結局は日本のものだ、俳諧で独逸の世界を描き出すことは出来ない」と、結論付けている。

これには斎藤茂吉が強く反応していて、「言葉が日本に帰つて来るんですかね。歌だとすると言葉が大和言葉だから、外国の気分が出にくいですね」、「第一西洋の事物がなかなか歌や俳句に入らない」と共鳴している。茂吉にはドイツ留学時代の歌集「遠遊」や「遍歴」、エッセイ集「ドナウ源流行」もあるが、それゆえいつそう、短歌俳句に「外国の気分が出にくい」、油断すれば直ぐ「日本に帰つてしまふ」ことへの実感があつたのだらう。

こんなところを読んでもう一つ思い当たるのは、丁度この座談会があつた頃、和辻哲郎が彼の代表作の一つとな

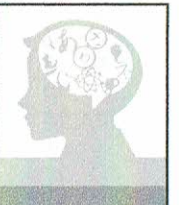
初めて知つたのだが、「日本文学に於ける和歌俳句の不滅性」なる座談会（『文学』昭和一〇年九月号）で言われたものだった。そのために折角の問題提起や指摘があつてもそれ以上の追及や発展には至らぬまま話が移つてしまふなど、まさに隔靴搔痒の趣もあるのだが、逆にその散漫さゆえの広がりもあつて面白かつた。座談会の出席者は、露伴を中心に安倍能成、斎藤茂吉、茅野蕭々、寺田寅彦、野上豊一郎、和辻哲郎、そして雑誌編集部兼司会として西尾實、藤森朋夫である。夏目漱石門下の勢揃いの様でもあるが、見方を変えると、一人の明治文化人を囲んで大正教養主義文化人たちが日本の伝統文学について語り合つている図でもある。ちなみに露伴はこのとき六八歳になるが、今年没後百年が言われる森鷗外より五歳下、そして尾崎紅葉、夏目漱石と同年であつた。令和時代ともなつた今から見ると、まるで日本近代の知の博物館でも覗くような趣きだ。余談だが、私は、ここで司会を勤めている西

つた『風土——人間学的考察』（昭和一〇年九月）を刊行している事実だ。一七文字のなかに季語まで条件づける俳句が、日本の風土と社会、人間関係が最も凝縮された、典型的な日本の文学だと、和辻哲郎は確信したのであつたらう。そして、この事実を前にすれば、これからますます世界に進出、日本の国際化を目指している、目指そうとする「今の若い人」たちには、「俳句なんぞ」は不要、「通用しません」ということになつたのだらう。

短歌も俳句も苦勞するほどの実作経験のない私には、残念ながらこのあたりのことについては何も言えない。ただ、そういう門外漢の他所限から言うのと、今では俳句の国際化という事実もあるし、もう片方には「ネット短歌」を楽しむ無数の「若い人」たちという事実もある。彼らは伝統語彙語感などに縛られることもなくごくごく気楽に国境を越えているのではないだらうか。そういう意味では和辻哲郎の心配は杞憂に終わったようだ。



丁短歌往來山(今和4年12月)



〈歌・小説・日本語〉68  
ことばと人生と歴史  
勝又浩

今年は鉄道創設一五〇年だそう、本誌も八月号に「特集 鉄道のうた」を組んでいた。つい誘われて拾い読みをしたが、やはり古いものが身に合うのだろう、青山仁選「鉄道関係のうた50首抄」が面白かった。「線路」「車両」「車内」等々の分類には意表を突かれたが、そういうなかで覚えのある子規や啄木や寺山に出会うのも新鮮だった。他にもさまざまな関連の催事が目についた。なかで不思議なのはNHKの力の入れ方で、テレビでもラジオでもいろいろな特集番組を設けていた。ローカル線が次々に廃止になる時代だが、片やNHKは唯一稼ぎのある公共事業だから、その後ろめたさからの斜陽鉄道へのエールなのだろう、いや、コロナ騒ぎで観光落ち込みだから鉄

道イベントには政治的な裏があるね、等々と言うのは我々の酒宴談義である。そんなことを言いながらもテレビはよく見ていて、それで知った情報を楽しんだりもしている。たとえば毎年その人出ぶりがニュースにもなる初詣、正月の神社参りは鉄道の普及とともに始まった近代の習慣に過ぎないという事実があった。それまでは祭礼葬礼など、村や家の行事に従った神社参りがあるばかりだったが、汽車に乗ることがちよつと贅沢な遊びになったことと結びついていたの初詣なのだという。今では初詣のための終夜運転はあるし、神社もそれで一年の稼ぎの大半を、収穫するのだから、どちらにも欠かせない行事だろう。西新井大師線や川崎大師線など、本線から枝分かれした神社

専用の支線が全国あちこちにあるが、これらは庶民の信仰の力なのか、それとも鉄道資本の策謀なのか。いずれにしても、こんなところにも日本人の特別な宗教観が現れているのではないかと私は、江戸時代にとときき突発した御蔭参りの近代形だろうと想像するが、これも、どちらにしても、一五〇年という歴史はやはり疎かには出来ないようだ。そういえば、本誌の「鉄道のうた」特集で、松村正直「短歌でたどる鉄道の一五〇年」が「開化新題歌集」の面白い事実を紹介していた。明治一年の刊行だから鉄道開通まだ六年後のことである。「郵便」や「瓦斯灯」等と並んで明治開化の新社会、風俗のなかに鉄道を詠んだ歌も早速現れたが、鉄道も汽車もレールも漢語俗語だから、初期の歌には使われていないというのである。汽車と言わずに汽車を詠っているところが、今となっては反って面白い。我々も国鉄がJRになったとき、小説にJRなんて誰が最初に書くだろうね

などと言いつつ合ったものだ。それが今や「と」いうようなことはいつの時代にもあるわけだ。

コンビニなどのトレットで、「ただ今清掃中。しばらくお待ちください。ご協力よろしくお願います」と、そんな札が立っていることがある。駅などでもよく見かける光景だが、これを写真付きでSNSにあげた外国人があったそうだ。そして、この「ご協力」は清掃を手伝えという意味ではないから注意せよ、とコメントしている、と。

著者は別のところで、「日本語が持っている内向きな力について僕は考える。英語の正しい使い方も、今の自分の気持ちも誤用でいいから英語で伝えたい」とも書いている。

話が妙な方向へ行ってしまったが、最近、片岡義男『言葉の人生』（令和三年、左右社）を読んでいろいろ刺激を受けた。翻訳書もあるような人だから日本語についての発言もあって、それがいかにも小説家らしい観点で、学術書を読むのとは違った面白さがある。最新刊の本書は八八編のエッセイからなるが、もとは週刊誌のコラムとして連載されたものだ。従って話題は多岐にわたるが、たとえば、今は聞かなくなつたカタカナことば、外来語を列記しているようなところでは、私は思わずウンウンと頷いてしまう。つまり決定的に同世代なのだが、それで著者の言うとおり、まことにことばは歴史である前に、先ずは人生なのだ、つくづく知つた、というわけである。と言つてもむしろ、著者は老人の練り言を並べているわけではない。たとえばこんなエピソードがある。

あるいはこんな例もある。会話で盛んに「think」を連発する日本人の話を知っていた外国人が、君の「think」はもうたくさんだ、直接的で確実な回答を聞かしてくれ、と迫つたというのである。この日本人は日本語の感覚で、謙遜しながら「think」を使ったのであったろう。日本人の「私は思う」は、必ずしも個人的な意見だとは限らないが、そうしたニュアンスは、まず外国人には伝わらないわけだ。そしてこのことは、言語の背景にはその意味だけではない、その文化の性格もあるという例になるだろう。

この、日本語を持つ「内向きな力」という言い方に、私はアツと思つた。思い当たることはたくさんあるが、この「think」などもその典型だろう。外国人には客観性の乏しい、自信のない発言としか聞こえない「私は思う」のなかに、日本人は実にたくさん強い、重い「思い」を籠めていることか。そして、そういうことをお互いに理解し合うのが会話だという暗黙の約束が、社会の根底にあるわけだ。何をせよ、とははつきりと書かかれていない「ご協力願います」の看板で誤解もなく通じる社会、ということであるだろう。

ここで話がジャンプするが、日本の民族文学である和歌や俳句も、考えてみればみな、この「私は思う」文化の結晶だと言つてもよいだろうと、そう、私は思う、わけだ。

ここで話がジャンプするが、日本の民族文学である和歌や俳句も、考えてみればみな、この「私は思う」文化の結晶だと言つてもよいだろうと、そう、私は思う、わけだ。